

はままつ演劇フェスティバル2024 劇評

藤津もな

MUNA-POCKET COFFEEHOUSE 「紙」

11/16 19時プレ公演

序盤から汗をダラダラ流して立ち回る役者から、舞台特有の、客席へ訴えかける切実さを強く感じました。

言葉遊びの冒頭に始まり、テンポのよい掛け合いを面白おかしく観ているうちに知らない世界へ引き摺り込まれ、取り返しのつかない事態へと巻き込まれてゆく。私はただの観客であるはずなのに、世界を掻き乱す登場人物たちの共謀者になったような気分させられる。紙飛行機を飛ばす演出はまさにその体現でした。無邪気に紙飛行機を折り、語り手の誘う声に、なんの疑いもなく、それを飛ばす。それが戦場であえぐ人間たちを撃つ砲弾になると、パンフレットを読んだ時点では想像もしていませんでした。終わった後アンケートを書いてもモヤモヤが拭えなくて、大きな舞台でした。

劇団からっかぜ「切子たちの秋」

12/1 14時

作り込まれた舞台セット、和やかに繰り広げられる会話劇、時代設定も合わせて、朝ドラやラジオドラマでも観ているかのような気分させられました。

日常を大きく外れることのない脚本で、派手なことは起こらない分、日常の細かな空気感や生活感が丁寧に作り込まれていて、気持ちよかったです。特に印象的だったのは、家族、家庭、地域、といった縁、結びつきが舞台の端々に出汁のように染み渡っていたことです。祖父母を思い出しました。この価値観はなかなか若い人だけでは表現できないだろうと感じます。その上で、上の世代の人物ほど「みんなでどうする」、若い人物ほど「私はこうする」という意思が強く見え、世代間にきちんと差が生まれている重厚感のある世界観でした。

演劇ユニットFOX WORX 「MAGICIAN'S WORTH」

12/8 15時

マジックと謎解きの要素の大きい、推理系ノベルゲームを見ているかのような舞台でした。

第一印象は、キャラクターのカッコよさに振った脚本だなと思いました。生身の人間ではなく、キャラクターのような…それが正にマジシャンだったのだと終わってから思い至りました。ミステリーをリアルタイムに舞台でやると、映画や小説のように「この時この人はこう動いていたのだ」と見返せない難しさがあるのだと気付かされましたが、とても面白い試みでした。不思議な模様の舞台美術は白い石造りの建物を想像させ、抽象と具体の間のような、それが年老いたマジシャンの雰囲気と合って格好良かったです。真ん中のパートは謎解きを考える割合が大きかったのですが、前後はきっちり2人の演技で締めてくれ、安心感がありました。

シニア劇団浪漫座「翔んで浜松」

12/15. 14時 (DVD鑑賞)

全編を通じて、安心して明るい気持ちで観られた舞台でした。

シニア劇団と聞いて、正直なところもっと落ち着いたゆったりとした舞台になるのかと思っていましたが、若者に見劣りしない元気な演技に、ビデオ越しでしたが驚かされました。生で観たらきっともっと感動したのだろうと思います。衣装も演出も盛りだくさんで、ゲスト出演の団体がいたり、安定した舞台作りをされているのだろうと想像しました。投影される字幕や画像は、観客に共通のイメージを持たせ、聞き逃しを防いでくれる親切な設計です。客席とのコミュニケーションがある演出、カーテンコール等からも、地域に愛されている劇団であることが伝わってきて、温かい気持ちになりました。